

第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

予想外の質問も考えて

沼田貞昭審査員長（日本英語交流連盟会長）現代的な課題をわかりやすく解説する発表ばかりだった。準備してきたことを自信をもって発表するのも大事だが、予想外の質問をされた時にも答えられるよう、関連事項まで深く考えを巡らせておくことが、課題だろう。

スキルと創造性 実感

ミシェル・シーガル氏（在日米国大使館領事部副領事）全国から集まった皆さんに、英語という外国語で話すスキルと創造性を見せてもらった。この英語学習を継続して、できれば英語を学ぶ上で様々なプログラムのある米国に留学してくれることを望んでいる。

議論で戦う力を

杉浦康之氏（東洋文庫専務理事）ビジネスの世界ではプレゼンテーションなしで質疑応答になることも多い。どの発表も準備していたが、少したたかれ足りない気もした。どんな質問にも答えられる、議論で戦う力を身に付けてほしい。

理解しやすい話術を

鈴木武生氏（アジアユーロ言語研究所代表取締役）日本人は、相手の興味より自分の好みを優先して話す傾向がある。相手に理解してもらえるよう話す技術を身に付けることが、国際社会で活躍するために必要になってくるだろう。

大会のレベル向上

ウィリアム・スポサト氏（コメンテーター、ライター）皆さんのスピーチから私も多くのことを学ばせてもらった。ビジネスの世界では、プレゼンテーション能力が非常に重要になってきており、このコンテストの存在は日増しに重みを増してきている。レベルも高くなった。

環境問題 質の高さ

竹本和彦氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所所長）環境問題について、現場の情報も取り入れた質の高い発表が多かった。これからは英語でのコミュニケーション能力の上達に努め、将来のキャリアにつなげてほしい。

スポーツ大会招致に必要

徳増浩司氏（アジアラグビー会長）ワールドカップを日本に招致する上で、英語のプレゼンテーション能力は重要だった。今後、多くのスポーツ大会を日本に招致するためにも、こうした場で若い人が英語のスキルを磨くことが大切だと思う。

テーマ絞って集中を

トム・ベーカー氏（ジャパン・ニュース記者）他人の前で話すのは緊張する。ましてや母国語以外で話すのは勇気がいる。みんなよくやった。ただ、概略の説明に時間をとると、聴衆は飽きてしまう。テーマを絞り、一つのことに集中して話すようにしたい。

【後援】文部科学省、外務省、米国大使館、国立大学協会、公立大学協会、日本私立大学団体連合会、東京都専修学校各種学校協会、全国外国語教育振興協会、ラグビーワールドカップ2019組織委員会、出版文化産業振興財団
【協賛】共立メンテナンス、イオン、フジタ、みずほ銀行、三菱商事
【特別協力】全日本空輸、AOKI、イオン環境財団
【協力】観音温泉、三京エンタープライズ

論理的な思考力、説得力を、画像や映像資料を交えて英語で競う「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」（主催・神田外語グループ、読売新聞社）が9日、東京都千代田区のみうり大手町ホールで開かれた。質疑応答の配点が従来の2倍となった第6回の今年は、全国の大学・専門学校など127校から641人が応募。2次予選を勝ち抜いた個人5人、グループ5組が熱のこもったプレゼンテーションを繰り広げた。

研究成果世界へ

最優秀賞

古賀碧さん、チャン・ティ・ジウ・ヒエンさん、後藤みどりさん（テーマ③）
最優秀賞を受賞した熊本市の崇城大大学院1年の古賀碧さん、同大3年のチャン・ティ・ジウ・ヒエンさん、同大4年の後藤みどりさんの3人組は、大学の起業部の仲間。白衣に身を包んで理系らしさをアピールし、息の合った発表で頂点を極めた。

取り上げたのは、光合成細菌を用いた環境保全プロジェクト。起業を目指して取り組んでいる研究内容を、グラフや画像、動画を効果的に使って発表した。化学肥料や農薬を使うと土壌がダメージを受け、作物や地下水も汚染される。自然由来の光合成細菌を使えば、作物の病気を予防するだけでなく、収穫量の増加、品質の向上にもつながる。ただし、100円当たりに9000円以上かかるコストがネックだった。



白衣姿であいさつする（右から）古賀さん、ヒエンさん、後藤さん（9日、東京都千代田区のみうり大手町ホールで）＝秋山哲也撮影

焼酎の粕と水、光合成細菌を混合することで、光合成細菌の性質を保った溶液を作り出すことに成功した。「クマレッド」と名づけた溶液は、100円当たり3500円。環境に優しいだけでなく、作物の品質も向上するため、1反当たり9万円の収入増加が見込まれるという。

ビジネスモデルとして確立するため、国内の農家と対話をし、タイへ市場調査に行くなどした。その上で、事業を始める場所としてタイやベトナムがふさわしい、と結論づけた。

審査員からは「自分たちの経験を見事に表現し

た、分かりやすい発表。説得力があった」と講評された。

「光合成細菌が環境問題を解決するという重要性を、日本だけでなく世界に広めたくて参加した」とリーダーの古賀さん。白衣を着た理由を、ヒエンさんは「研究者だという心を忘れなくなかった」と説明。後藤さんは「賞に恥じないようになりたい。実現したい社会に向け、改めて今日がスタート」と決意を新たにしていた。

グローバル社会での活躍を目指す学生たちにスキルアップの場を提供しようと、2012年に始まった。その年のテーマから一つを選び、それに沿って原稿を作り、プレゼンテーションをする。1次予選、2次予選を通過した個人・グループが本選に臨む。制限時間は10分以内で、その後、審査員による英語の質疑応答がある。審査項目は、内容・構成（50点）、口頭発表力・説得力（30点）、質疑応答（20点）。

【テーマ】

- ①ラグビーワールドカップ2019日本開催、キャンプ地をわが町に！
- ②日本の本の英訳版翻訳を売り込め！
- ③地球を守れ！環境保全の新技术を発表
- ④新たなネット活用法を提案！資源の共同利用

受賞者は次の通り。（敬称略）

▽文部科学大臣賞（最優秀賞）

古賀碧（崇城大大学院1年）、チャン・ティ・ジウ・ヒエン（同大3年）、後藤みどり（同大4年）